

小学校教員の教え方改革
—体育嫌いは子どもだけじゃない—

東洋大学 山下ゼミ A

○千葉 孝子 池田 実央 川崎 妙子 橋本 英里香

1. はじめに

スポーツ庁平成 29 年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると平日 1 日の外遊び・スポーツ実施時間が 30 分以下の小学生は 6 割以上であり（図 1 参照）、子どもの運動実施の二極化が指摘されている。

こうした子どもの運動不足は肥満児の出現、ストレスに対する抵抗力の低下、生活習慣病の増加など様々な健康問題につながる（日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康分科会、2010）。肥満傾向児の出現率の推移をみると、平成 29 年度「学校保健統計調査」では「男子、女子共に肥満傾向児の出現率は低下している」とされている。しかし、11 歳の肥満傾向児の割合は男

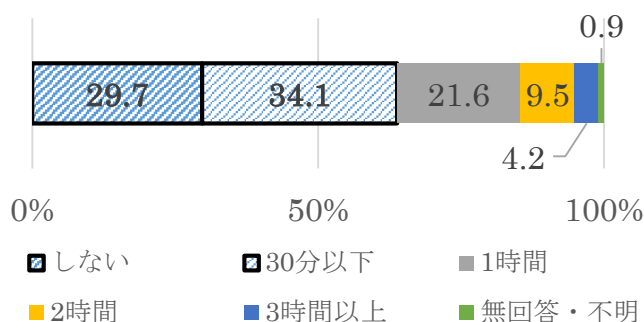


図 1. 小学生の平日1日の外遊び・スポーツ実施時間
(スポーツ庁平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果をもとに作成)

子が 9.69%、女子が 8.72%である。つまり、およそ 10 人に 1 人の子どもが肥満傾向にあると計算できる。日本の場合、運動習慣は小学校での体育の経験が関連している。現行の小学校学習指導要領でも、体育の目標を「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てると共に健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」としている。しかしながら、小学生のうち体育が「好き」と答えた子どもは 83.1%（ベネッセ教育総合研究所、2015）にとどまっている。「第 4 版小学校の体育授業づくり入門」では体育嫌いになるきっかけを、有能感が得られない、先生やクラスメートから低い評価を受けるといった不安、運動を強制する感覚を与える授業形態や指導方法の 3 つに大別している。すなわち、体育の授業を構成する様々な要素が子どもの体育嫌いを生み出している。

以上のことから、子どもの運動実施の二極化は大きな問題であり、そうした運動習慣は体育と密接に関わっているため、本格的に運動に触れるようになる小学校体育のあり方を再考する必要があると考える。

そこで、本研究では小学校の体育の授業に着目し、小学校体育の質的向上を目的とした政策を提言する。

2. 研究方法

本研究では、子どもの運動に関する現状や小学校体育の現状を把握するため、宇都宮市の小学校に訪問し、現役教員に対して以下の通りインタビューを実施した。また、文献調査を用いて、小学校教員の指導実態把握を試みた。

(1) インタビュー調査概要

調査対象：小学校教員 1 名

調査内容：子どもの運動に関する現状や小学校体育の現状についてなど

調査日時：2018 年 9 月 16 日

(2) 文献調査

小学校教員の体育の好き嫌いや指導の実態について把握するため、小学校教員の体育指導についての先行研究などを文献調査した。

3. 結果

(1) インタビューの結果

インタビューの結果から分かったことは、子どもの運動実施の二極化が最も大きな問題となっていることである。昭和 60 年代の体育は体力向上を目的とし、反復練習が主であり、実際に当時の体力水準は今よりも高かった。しかし、こうした体育は運動に親しみを持つことにはつながらず、運動や体育が嫌いな子どもを生み出している一因であった。そこで、学習指導要領は子ども達に運動有能感を持たせ、運動に親しみを持てるような内容へと変化した。それに伴って、運動の特性に触れさせ、運動することの楽しさを伝えるような授業内容を展開していくことが教員に求められた。また、特定の種目を行うのではなく運動の要素を取り入れた遊びを考えて行い、運動が苦手な子どもに対して苦手なことを克服させるのではなく、得意なことを伸ばし、楽しいと感じられるようにするといった工夫をしていることが分かった。

(2) 文献調査の結果

文献調査から、小学校体育は体育が専門でない教員も指導を行わなければならないため、教員においても体育指導が得意な教員と苦手な教員に大きく分かれていることが明らかとなった。宮崎市小学校体育連盟(2014)による宮崎市の小学校教員を対象とした調査では、「体育指導が得意である」と答えた人は 32.7%、「体育指導が苦手である」と答えた人は 67.3%であった。体育指導が苦手と答えた理由として、「教材研究をするゆとりがない」、「指導技術(指導力・指導法)に自信がない」、「専門的な知識が少ない」、「自分に苦手意識があるため、楽しさを感じながら授業を進めることができない」、「よい手本を見せられない」などが挙げられている(宮崎市小学校体育連盟、2014)。宮尾ら(2015)は体育の実践状況についての研究で、体育が苦手な教師は「授業計画を立てる」、「児童の能力を把握する」、「達成目標を設定する」、「教材や学習活動を工夫する」、「指導方法や教え方を工夫する」ということを積極的に行っていないという結果が出た。このことから、体育が専

門でない教員に対しては、体育指導について学ぶ場が必要であるといえる。しかしながら、実際は、体育に関する「研修に参加したい」と答えた人は46.6%（鬼澤ら、2017）であるのに対し、「研修に参加している」と答えた人は17.5%（鬼澤ら、2017）であり、教員の体育に関する研修への参加意欲は高いものの、参加には至っていないことが分かった。

（3）本調査の考察

小学校学習指導要領は運動能力の低い子どもたちに配慮したり、運動有能感が得られるような指導内容へと変化していることが分かった。これらは先にあげた体育嫌いになるきっかけのうち、有能感が得られない、先生やクラスメートから低い評価を受けるのではないかという不安、の2点をカバーしている。つまり現状の体育の指導内容は運動への抵抗感をなくし、運動実施を促すものであった。このように指導内容が変わっているにもかかわらず、体育嫌いや運動が不足している子どもが一定数存在しているということから、変更された指導内容が十分に実施されていないと考えられる。その要因として体育指導が苦手な教員の指導力不足が推測できる。

本研究ではこれらの課題を解決するため、「楽学タイム」という教員のための体験型講習会を提案する。

4. 「楽学タイム」設置の提案

（1）「楽学タイム」

「楽学タイム」とは、小学校教員が体育の指導方法を「楽」しみながら「学」ぶための、専門インストラクターによる、教員のための体験型講習会のことである。外部専門インストラクターを講師に招き、教員と子どもがと共にレクリエーションなどを行う取り組みである。放課後の時間を利用し、週1回、45分の時間を設け、各小学校の校庭や体育館を活動場所として使用する。専門インストラクターは子どもにもスポーツを指導している外部団体に講師の派遣を依頼する。その小学校の児童や学童に通う児童、地域の子どもの参加を自由にして、実際に専門インストラクターが子どもたちに指導する場に教員が参加する。

「楽学タイム」はインストラクターと教員のみで行う一般的な講習会とは異なり、子どもたちも参加することでより実践的な指導を体験しながら学ぶことができる。また、自身が務めている小学校で講習会を実施するため、参加がしやすくなる。さらに教員にとっても「楽学タイム」を通して運動の楽しさが実感できるため、体育への苦手意識が払拭されるという効果もある。

（2）期待される効果

本提言において期待される効果は小学校教員の体育の指導力の向上と充実した体育の授業を通して、子どもたちに運動の楽しさを伝えることによって、子どもの運動実施の二極化を解消する手助けとなることである。

また、「楽学タイム」を実施することによってもたらされるその他の効果として、教員の同僚性の希薄化の解消が期待できる。中央教育審議会（2006）は現代の教員の現状として、

小学校の小規模化などを背景に教員の同僚性が希薄化していると指摘している。教員の職務には教員間の協働する力が必須であり、体育の指導力向上においても不可欠である。「楽学タイム」で教員同士が共に運動することでコミュニケーションが生まれ、同僚性の希薄化の解消につながる。さらに、「楽学タイム」によって遊ぶための空間、時間、仲間の確保が可能になるため、子ども達への外遊び・スポーツを行う機会の提供も期待できる。また、Ladwig et al. (2018) では、体育の授業の記憶は成人期の運動習慣にも影響を及ぼしているという結果が出た。つまり、体育嫌いを無くすことは生涯にわたる運動実施の促進にもつながる。

<参考文献>

- ・ベネッセ教育総合研究所 (2015) 「第 5 回学習基本調査」 (2018.9.23 参照)
- ・中央教育審議会 (2006) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」 (2018.9.23 参照)
- ・Ladwig, M. A., Vazou, S., & Ekkekakis, P. (2018) . “My Best Memory Is When I Was Done with It”: PE Memories Are Associated with Adult Sedentary Behavior. *Translational Journal of the American College of Sports Medicine*, 3(16), 119-129.
- ・宮尾夏姫・三木ひろみ (2015) 「小学校教師の体育授業実践に対する支援の検討 一実践状況と指導上の困難さに着目して一」 (2018.9.29 参照)
- ・文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領」 (2018.9.23 参照)
- ・鈴木秀人・山本理人・杉山哲司・佐藤善人編著 (2016) 『第 4 版 小学校の体育授業づくり入門』学文社 p.28
- ・文部科学省 (2018) 「平成 29 年度学校保健統計調査」 (2018.9.23 参照)
- ・日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康分科会 (2010) 「日本の子どものヘルスプロモーション」 (2018.9.23 参照)
- ・鬼澤陽子・安原志帆・内藤年伸 (2017) 「小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究 一群馬県における低学年の体育授業の実態調査を通して一」 (2018.9.23 参照)
- ・スポーツ庁 「平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」 (2018.9.23 参照)